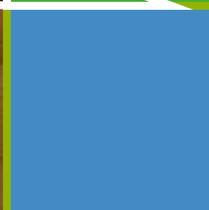




ガイドブック



木の文化・木のおもてなし



## ▶ 目次

「木の文化・木のおもてなし」がめざすもの —3

「木のおもてなし」に活かす日本の「木の文化」の定義 —3

「木の文化・木のおもてなし」の視点 —4

私が考える「木の文化・木のおもてなし」

涌井雅之 / 隈研吾 / 水戸岡鋭治 / デービッド・アトキンソン / 赤松明 / 戸村亜紀 —6

「木のおもてなし」の提案 —8

「木の文化・木のおもてなし」事例のご紹介 —9

- ① ▶ 秋田～秋田杉と技、そのいにしえと今を味わう —10
- ② ▶ 北海道オホーツク地域～クラフト文化を巡る —12
- ③ ▶ 木工のまち・大川と美しい列車の旅～300年の歴史とともに郷土に親しむ —14
- ④ ▶ 新潟・上越～雪国で暮らす知恵は、思いやりと優しさの証 —16
- ⑤ ▶ 富士山～荒ぶる自然と信仰、木とともに生きる旅 —18
- ⑥ ▶ 高山・飛騨～木の文化をたどって歩く、歴史と技の楽しみかた —20
- ⑦ ▶ 熊野古道・伊勢路～巡礼と尾鷲ヒノキを迎える現代の旅人 —22
- ⑧ ▶ 高知県梶原町～雲の上の町で森と出逢う —24
- ⑨ ▶ 吉野・堺・灘～桶樽と日本酒の物語 —26
- ⑩ ▶ 長野・軽井沢～懐かしくて、新しい、木と森が迎える国内有数のリゾート —28
- ⑪ ▶ ブナの森とヒバの森～癒しと健康、五感への贈り物 —30
- ⑫ ▶ 地域のアンテナショップが伝える木のおもてなし —32

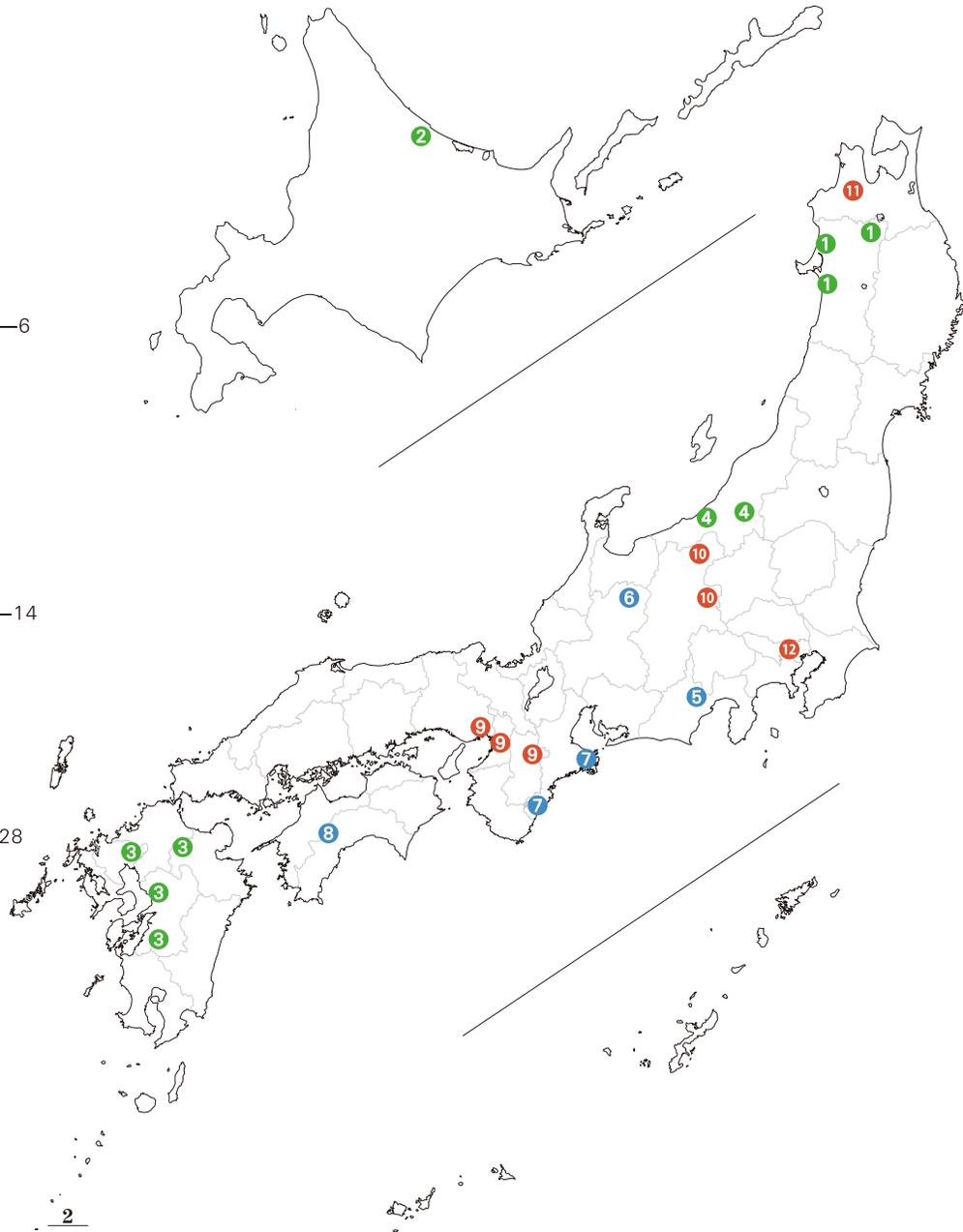
## 付録DVD

●木の文化・木のおもてなし

秋田編 / 富士山編 / 桶樽編

●検討委員特別インタビュー

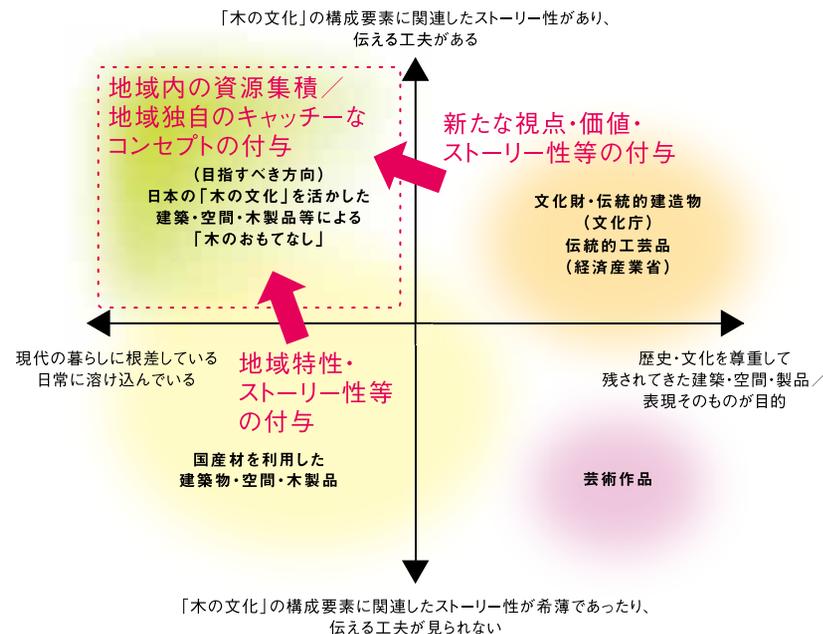
涌井雅之 / 隈研吾 / 水戸岡鋭治 / 赤松明 / 戸村亜紀



## 「木の文化・木のおもてなし」がめざすもの

日本は古来より生活のあらゆる場面で木を使い、木に親しんできました。それは自然との共生であり、暮らしの有り様や衣食住と一体化したものであり、必然的なものであったに違いありません。こうした「木の文化」に焦点を当て、昨今、急増するインバウンド(来日観光客)への「木のおもてなし」につなげ、木を使った建築や製品、サービス、体験の価値を向上させ、観光需要の創出や地域の活性化の有力な資源として活用できると考えています。これを通じて、「木を使い、活かす」取組をさらに増やしていくことを目的としています。

そのためには、空間や製品単体ではなく、その背景や森林との共生・循環、技や物語性、木と異素材を組み合わせたデザイン等を合わせて伝えることが必要です。新たな視点や地域特性のストーリー等を付与し、資源を集積しコンセプトを明確にすることで、「モノ」から「コト」への変換を図り、日本の木の文化の持つ「本物感」や「奥深さ」を訴求できると考えられます。



## 「木のおもてなし」に活かす日本の「木の文化」の定義

日本の「木の文化」のストーリーを構築するための要素は右表のように分類、定義できると考えられます。これらの文化的要素を、ひとつではなく複数有している卓越した取組こそ、インバウンドにとって新鮮で、深く興味をそそられるモノであるに違いありません。大切なことはこれらを「いかに伝えるか」であり、日本や日本人にとってそれが日常的で当たり前のことであっても、文化・風習の異なる国の人々に体感、実感してもらうことが求められているのです。

	要素	視点
共生	①産地や作り手を慕う	生産地の環境や、生産者の想いや工夫・努力に目を向け、寄り添い、慕っている
	②足を知る	資源の循環利用・多段階利用、もったいない精神、自然と調和を実現している
風土	③地域性を活かす	地域の気候・地理、歴史・文化、生業・生活が持つ特色とつながっている
	④時を刻む／活かす	木の持つ時間的価値(経年美化、改修の容易性・自ら手入れする)が活かされている
技	⑤技を活かす	熟練の技や卓越した技術が木の良さを引き出し、用の美や情緒を生み出している
	⑥軸を持ちつつ変える	伝統的価値を軸に据えつつ、現代の生活様式に合う意匠・機能・用法にしている
心	⑦和の心を伝える	日本ならではの心情や所作、作法や趣き等を、木を活かして表現・演出している
	⑧暮らしが潤う	木を適切に活かすことで居心地・使い勝手を高め、心豊かな暮らしを育んでいる

## 「木の文化・木のおもてなし」の視点

「木の文化・木のおもてなし」を考える際に、以下の視点を持つことが重要と考えられます。

① 特徴的な「木の文化」の構成要素を複数有し、地域の歴史文化・生活様式・地場産業等との関係性の“ストーリー”の深掘り・再整理がなされていること。地域特性を引き出し、独自性があり、キャッチーなコンセプトが確立され、かつ地域内で複数の資源が面的に集積されている事例群（地域）。木の施設等を拠点に、地域への滞在を促す多様なソフトが構築されていること。

② 複数の施設・製品群等に一貫する「木のおもてなし」の世界観が構築されていたり、「木の文化」の特徴の“ストーリー”を体感できる空間・プログラムが構築されていること。

③ 地域の①林業・木材関係者、②旅行者、③観光施設（見学・物産等）の何れにおいても、「木のおもてなし」を活かした収益モデルが構想されていること。

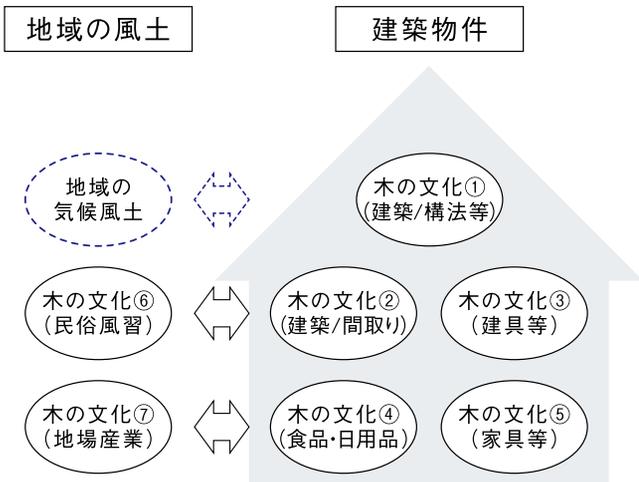
集まった全国の事例をもとに、先導モデルとして3つのパターンを考えました。もちろん、これらの組み合わせやさらに進化させたモデルもありえます。

### （例1）地域に多様な「木の文化」を支える技術・製品群等が面的な集積された地域



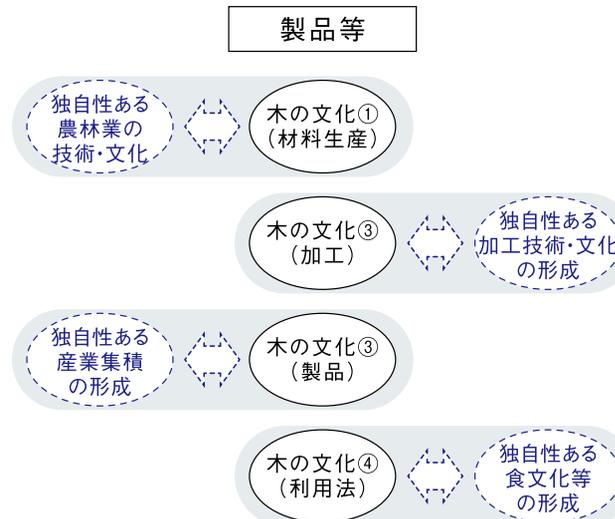
地域において、木の文化を支える材料生産から加工技術、製品や材料を活かした建築、その利用法までが集積し、それぞれが関係性を持ちながら、地域の特性や個性につながっているもの。

(例2) 多様な「木の文化」が集積されている建築物等（宿泊・飲食施設、文化・交流施設）



地域の気候や地理、民俗や風習、地場産業などが木を使った建築物等の構法や間取り、設備、建具や家具、日用品等に活かされ、そこでの暮らしを支えたり、来訪者の滞在や体験、交流へつながっているもの。

(例3) 周辺分野の技術・文化と連動して、多様な文化の派生に寄与する製品等



木の文化としての材料生産や加工、製品、利用法などが農林業や加工技術、産業や食文化などの周辺分野と時には地域をまたいで連動し、独自の発展・進化を遂げて、多様な文化を生み出しているもの。

## 私が考える「木の文化・木のおもてなし」

本事業の検討委員を務めた6名の有識者の方々にそれぞれのご専門の立場から、「木の文化・木のおもてなし」をどう考えるべきか、どう活かしていくかについてメッセージをいただきました。

### 涌井雅之

東京都市大学特別教授、  
岐阜県立森林文化アカデミー学長。  
造園、ランドスケープアーキテクト  
として「景観10年、景観百年、景観千  
年」と唱え、人と自然の空間的共存を  
テーマに多くの作品や計画に携わっ  
ている。

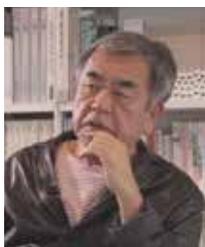


私は「景観10年、風景100年、風土1000年」と言うのですが、日本の景観の後ろには暮らしのある風景があり、その後ろには暮らしという文化を醸成してきた風土があります。その風土の中で醸し出された文化、技能、技術。これらが地域を光り輝かせている一番大きな要因だと多くの人に気づいてもらいたいと思います。

長い間その土地に暮らしてきて、自然や産物を知り、それを上手に自分のものにしながらか暮らしの基礎をつくっていく。誇りを持って内発的に自分たちの光を外に見せる行為と、未来が見えないがゆえにヒントを探す人々がシナジーするのが今の観光です。今の日本は宝物の蔵であると皆さんに気づいてほしいと思います。

### 隈研吾

建築家、東京大学教授。  
その土地の環境、文化に溶け込む建  
築を目指し、ヒューマンスケールのや  
さしく、やわらかなデザインを提案、  
国内外で実績多数。新国立競技場に  
47都道府県の木を使うなど、木の建  
築を多く手がける。



木は人間の手でつくったことを一番後世に残しやすい材料で、手をかけたことがそのまま木に伝わるので、職人や工務店でも良い人に会い、手を木に残せば、それは自動的にメッセージを伝えてくれます。

これからの街づくりの武器は、昔からある木の建物と新しくつくられた木の建物が相乗効果を生み出し、響きあうものにするのだと思います。

日本が好きなインバウンドの方々は、自分で発見したことを大事にしています。誰もが行く所よりも、自分が発見した面白い場所を大切にするので、どこにでもある情報ではなく、別の興味をそそられる情報だと入り込んでくれます。日本の地域にはそんな宝がまだまだ眠っていますから、彼らに宝探しの楽しさを提供することが重要だと思います。

### 水戸岡鋭治

工業デザイナー。  
建築・鉄道車両・グラフィックなどさ  
まざまなジャンルのデザインを行う。  
クルーズトレイン「ななつ星in九州」  
「或る列車」などJR九州の駅舎、車  
両のデザインは、広く社会の注目を  
集めた。デザイナーは地域の編集者  
であると自らの仕事を語る。



自分の国の豊かな気候、自然、文化、食を吸収し学習することは最も大切です。豊かな旅をすることが豊かな生活を送る基盤になります。日本人が豊かな旅をしていることを海外の人が知り、日本で旅をする。日本の文化を海外の人にってもらい、お互いの文化に理解を深めていくことで、様々な文化が重なってより豊かなものが育っていくと思います。

手間ひまのかかった、曼荼羅のような世界が豊かなものだと人は感じます。「ななつ星」が喜ばれる理由は、手間がかかっていて、クラシックで、今の技術ではつくれないものだからです。多くの人が喜び、世界中の人が感動する商品こそ生き残っていくと思います。

## デービッド・アトキンソン

小西美術工芸社社長。元ゴールドマン・サックス証券アナリスト。2009年、国宝・重要文化財の補修を手がける小西美術工芸社に入社、2011年に同会長兼社長に就任。日本の伝統文化を守りつつ、日本の観光立国へ向けた改革の提言を続けている。



観光立国に必要な4つの要素は「気候」「自然」「文化」「食事」と考えています。日本は雪も降れば亜熱帯もある気候と、豊富な森林、里山など自然との付き合いが深く、暮らしや地域、食とも密接につながってきました。こうした背景から「木の文化」は自然と共生してきた日本の暮らしの歴史の重要な側面を持っており、それはインバウンドにおいても独自の魅力を感じるものと考えています。森林や木を軸に据えた体験や、スキー、ハイキング、山登り、川下り等は、実は日本が見落としてきた重要な観光資源といえるでしょう。日本の観光スポットは「点」で行われ、滞在時間も短く、生産性が低いものが多く感じます。日本の森林や木からひも解かれるストーリーは、建築物や伝統工芸のみならず、食、体験や健康・癒しまで幅広い「おもてなし」の観光コンテンツを生み出すでしょう。そのヒントがこれら事例の中にあると思います。

森林や木の付加価値を高めれば、木の利用が促され、森に手が入り、結果的に健全な森づくりが進みます。日本の森林保護のためにも、こうした視点で多業種が組むことは重要で、地域経済の活性化にもつながります。

## 赤松 明

ものづくり大学学長。

専門は木材加工学。木造基礎や家具製作などを通じ、木材加工法を研究している。現在は学長として、次世代のテクノロジスト育成に励む。2023年技能五輪国際大会の愛知県への誘致に向けた検討会の座長をも務めた。



木は腐る素材です。それは時には人間にとって不利益になることもあります。地球へ戻るといってもあります。自然に還るといことはこれからは長所として考えるべきです。

木に対して関心を持たない人々が増えてくると大変です。子どもたちには木を使ったものづくりに憧れを持ってほしい。今、木に携わっている人、木でものをつくったり、環境を整備している人は自らのやっていることに自信を持ってほしいと思います。世界や地球のために、自分たちの経験を活かし、誇りを持って社会とつながってほしいと思います。

## 戸村 亜紀

クリエイティブディレクター。商業施設のネーミングからロゴデザイン、プロダクト開発など幅広く活躍。都市と農村を繋ぐサービスを生み出す活動など、環境問題や地域産業活性化を通じて次世代の居場所と出番の創出を目指している。



日本には、木は生き物であり、それを大切にしようという文化が根強くあり、この文化を海外へ発信することで海外からの見方もまた変わってくるでしょう。

日本の伝統的な木の道具をどう融合させ、進化させるのか、も大切です。必要のないものは求められなくなりますから、技術を何に置き換え、100年続く仕事を生み出せるのか、を考えることが重要です。そのためには、産地以外の人の交流や海外の意見も聞くことも必要です。

人が集まれば、ものも増えます。それによって今まで来なかった人が来ると、次に様々なアイデアも集まります。森へ、地域へ、まずは人を集めることが大切です。

## 「木のおもてなし」の提案

### 木のおもてなしを实践するためのポイント

事例や検討委員の意見をもとに、木の文化を活かした木のおもてなしの視点や手法を整理・分析しました。  
これらを組み合わせたり、ひとつの流れにまとめていくことで、インバウンドを始めとする来訪者へインパクトある訴求が実現し、  
新たな木の活用促進につながることを期待されます。

- 地域のブランド材等を使った歴史的建築物と現代の木造建築を同時に味わえる体験を提供する
- 公共空間や交通など地域の「窓口」となる空間に木を取り入れ、人が集まる機能を付加する
- 地域特有の木の文化を、異なる空間や場所、アイテムで複数、楽しめる仕掛けを持つ
- 木を使った繊細な技、しつらえなどで「非日常感」を演出し、その良さを味わいながら贅沢な時間を過ごしてもらう
- 地域の地理・気候など自然の多様性に合わせた「自然共生の暮らし」を木の空間で味わってもらう
- 自然共生の国が育んだ、木を生き物や神様として扱う独自の日本の文化とともに木を使っている意味を、海外へ発信する
- 体験や環境、空間を通じて、地域の自然や森林を楽しみ、心身を癒し健康にすることで、滞在そのものの価値を向上させる
- 地域の文化に培われた技術を現代使いに置き換え、新たなものづくりを見せながら、それを購入、消費、体験につなげる
- 空間やものをつくる「人」に焦点を当て、「記名性」にこだわる見せ方、体験によって、希少性や特別感を伝える
- 木の来歴(トレーサビリティ)、生産プロセスに焦点を当てる、同じ樹種でも地域特性を明確にし、地域性ととも訴求する

シンボリックな「木の文化」を活かした「木のおもてなし」空間・体感プログラムを通して、地域が培ってきた「木の文化」の価値・魅力を体験

- (1) 地域のオリジナリティのある「木の文化」のストーリーを、地域の歴史文化・生活様式・地場産業の状況等をふまえて深掘りして再整理し
- (2) その深掘りした「木の文化」を支える技術・文化の価値・魅力を体感できるプログラム(実演・ワークショップ等)の開発等を通して、体感的にその魅力・価値を発信

木への親しみ、木の良さをより多くの  
インバウンド、来訪者へ伝える

ストーリーを知ること新たな気づき、  
関心呼び起こす

多様な分野、業種の参画を得て、  
多様な「木のおもてなし」を  
開発したり、展開していく

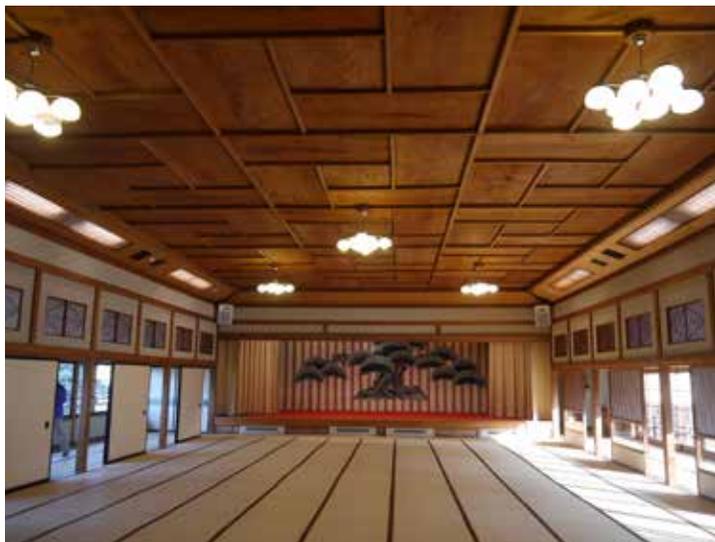


## 「木の文化・木のおもてなし」事例のご紹介

全国調査や事務局による調査・ヒアリングから集まった、  
木の文化を活かした木のおもてなしの事例をご紹介します。  
個々の事例は、もちろんそれぞれ魅力あるものですが、  
地域やテーマでストーリーをつなぐと、  
新たな「おもてなし」の資源としての顔が見えてきます。  
それが、インバウンドにとっての地域の宝物探しや新鮮な驚きにつながり、  
新たな需要の掘り起こしへ発展していくと考えています。  
事例のご紹介では、そんな視点からストーリーをまとめてみました。

# 秋田～秋田杉と技、そのいにしえと今を味わう

天然秋田杉は秋田県の米代川流域を主産地として成育し、能代市を中心に一大木材産業を築いてきました。1590年には豊臣秀吉が、秋田地方の領主であった秋田実季らに命じて造船や伏見城建築のために秋田杉材を献上させたため、秋田杉は全国的に有名になったと言われています。新旧の美しくも荘厳な建築物から、現代・秋田の玄関口、そして技を極めた木使いの品まで、この地に根付く木の文化はその伝統を活かしつつ、常に新しいおもてなしの心を追及しています。



旧料亭金勇 map1

料亭金勇は、木都能代を象徴する建物で、県内屈指の料亭として各種宴会や接待、婚礼などに広く使われました。現在の建物は、1937年に2代目金谷勇助氏によって建てられたもので、1998年に国登録有形文化財に登録されましたが、2008年に閉店し、翌年に能代市に寄贈されたものです。天井は樹齢260年以上の天然秋田杉の一枚板が使われ、当時の栄華に思いを巡らせながら、今でも食事などが楽しめます。

秋田県能代市柳町13-8 <http://www.kaneyu.jp/>

## 秋田杉の誕生と来歴

天然秋田杉は秋田県の米代川流域を主産地として成育し、能代市を中心に一大木材産業を築いてきました。1590年には豊臣秀吉が、秋田地方の領主であった秋田実季らに命じて造船や伏見城建築のために秋田杉材を献上させたため、秋田杉は全国的に有名になったと言われています。寒冷地で育った秋田杉は年輪が詰まり、木目が細かく、狂いも少ないことから重宝され、この地の文化とおもてなしの象徴として存在しています。



秋田文化産業施設「松下」 map2

大正初期に創業され、歴史的建造物としても価値がある「旧割烹松下」を再活用し、伝統文化である「あきた舞妓」の復活など、秋田の文化に触れることのできる施設です。伝統的な建築技法、天井の木目の美しい一枚板、手作りのガラスなど卓越した職人技が見て取れます。茶寮では秋田杉製のテーブルや椅子が配され、木の香りが漂う心地よい空間でくつろげます。

秋田県秋田市千秋公園1-3

<http://www.matsushita-akita.jp/>



### 十和田ホテル map3

国際情勢の緊迫などで幻となった昭和15年の東京オリンピックを前に、日本を訪れる外国人観光客のための宿として、政府の要請で建てられたホテルです。宮大工80名が技術を競ったと言われる空間が見事です。天然秋田杉の巨木を使った木造三階建てで、各部屋の床の間、天井、格子戸などは、その意匠がすべて異なっている豪華なつくりです。どの客室からも十和田湖の美しい風景を堪能できます。

秋田県鹿角郡小坂町十和田湖西湖畔 <https://towada-hotel.com/>



### 秋田駅西口バスターミナル map5

秋田杉を活用したおもてなしの心は現代の施設にも息づいています。秋田駅西口バスターミナルは、秋田杉をふんだんに使った木造のバスターミナルで、県都秋田市の玄関口にふさわしい「お客様をおもてなしする空間」として、木の可能性を全国にアピールしています。秋田駅前の景観に木の温もりをもたらしてくれます。

秋田中央交通 <https://www.akita-chuoukotsu.co.jp>



### ノーザンステーションゲート

#### 秋田プロジェクト map4

JR秋田駅を中心とし、JR東日本秋田支社、秋田県、秋田市、秋田公立美術大学、県内事業者等が連携し、秋田杉を中心とした県産材を活用した豊かな木質化空間で来訪者や利用者をもてなします。壁や天井に秋田杉を使った待合ラウンジもあり、県産材の椅子やテーブルでゆったりくつろげます。これまでの施設と比べて、滞在時間も長く、物販の向上にも貢献しているそうです。

東日本旅客鉄道株式会社秋田支社

<https://www.jreast.co.jp/akita/>



### 秋田木工

秋田では杉だけではなく、木を自在に加工する技術で、木が暮らしに溶け込んできました。ドイツ人のミハエル・トーネットの曲木技術が日本に伝わったのが1901年。以降、100年以上も曲木家具をつくり続ける唯一の専門工房が秋田木工です。片手で持てるほど軽量でかつ丈夫、曲線の美しいフォルムを持つ家具はデザインと利便性を兼ね備えた家具です。

秋田県湯沢市関口字川前117 <http://www.akitamokko.jp/>



### 曲げわっぱ map6

切り出した秋田杉から柎目のみを取り出し、独自の技術で曲げ輪を作り、山桜の樹皮で縫留めして製作する曲げわっぱ。平安時代の遺跡からも曲げわっぱの器が発見されており、その起源はたいへん古いとされています。曲げわっぱは、木本来の調湿作用が余分な水分を吸収してくれるため、冷めてもご飯がおいしいと評判です。最近では、コーヒーカップやコップ、照明器具など、曲げわっぱの技術で多様な製品が生まれています。

大館曲げわっぱ協同組合：秋田県大館市宇大町29-1

<http://odate-magewappa.com/>

株式会社大館工芸社：秋田県大館市釈迦内字家後29-15

<http://www.magewappa.co.jp/>

## 北海道オホーツク地域～クラフト文化を巡る

オホーツク地域では、針葉樹のエゾマツ・トドマツ・イチイ、広葉樹のナラ・タモ・センなどを用いて、木目の美しさ、木肌のやさしさ、自然に磨かれた色彩の深みを存分に活かして作られた特色のある良質のウッドクラフトが作られています。日常使いの器から玩具まで、人の生活に寄りそう製品が多数あります。10の施設からなるオホーツククラフト街道はそんなクラフトたちに触れ、遊び、手に入れることができる、貴重な観光ルートです。



### オケクラフト

北海道置戸町では木工製品の製作と技術者を育成し地域産業を活性化するためにオケクラフトセンター森林工芸館があります。研修を終えたクラフトマンが生み出した木工製品は「オケクラフト」というブランドとしてセンターで展示販売しています。地域に根ざしているクラフト文化に触れることができます。

北海道常呂郡置戸町字置戸439番地の4

TEL:0157-52-3170/FAX:0157-52-3388 E-Mail:kougeikan@town.oketo.hokkaido.jp



木夢 森の美術館



木芸館 丸瀬布町



木のおもちゃワールド館 ちゃちゃワールド



オケクラフトセンター 森林工芸館



北海道立オホーツク流氷公園



バリエーション豊かなクラフトたち

## オホーツククラフト街道

北海道オホーツク管内には、「木とふれあうことができる施設」が10施設あります。木製遊具で遊ぶことができる施設や、木工のおもちゃや小物を製作するクラフト体験、木工品の展示販売を行っている施設など、様々な形で木と触れ合うことができ、その素材の良さを楽しむことができます。これらの施設が連携して「オホーツククラフト街道」という体験型の観光ルートになっています。

### ●木夢 森の美術館 [map1](#)

〒098-1501 北海道紋別郡西興部村字西興部276  
<https://komukan.com/>

### ●木楽館 遠軽町国産材需要開発センター [map2](#)

〒099-0414 北海道紋別郡遠軽町南町3丁目2番地224

### ●木芸館 丸瀬布町 [map3](#)

〒099-0207 北海道紋別郡遠軽町丸瀬布元町41番地

### ●木のおもちゃワールド館 ちゃちゃワールド [map4](#)

〒099-0701 北海道紋別郡遠軽町生田原143-4  
<http://cha2world.com/>

### ●果夢林の館 [map5](#)

北海道北見市留辺蘂町松山1番地4  
<https://onneyu-aq.com/facility1>

### ●オケクラフトセンター 森林工芸館 [map6](#)

〒099-1100 北海道常呂郡置戸町字置戸439-4  
<http://okecraft.or.jp/>

### ●オホーツク木のプラザ [map7](#)

〒090-0811 北海道北見市泉町1丁目3-18  
<http://www.owp.or.jp/>

### ●美幌林業館 [map8](#)

〒092-8650 北海道網走郡美幌町字新町3丁目  
<http://www.bihoro-k.com/html/towninfo-kiterasu.html>

### ●つべつ木材工芸館 [map9](#)

〒092-0225 北海道網走郡津別町共和127-2  
<https://www.town.tsubetsu.hokkaido.jp/>

### ●北海道立オホーツク流氷公園 [map10](#)

〒094-0023 北海道紋別市元紋別101番地  
<http://seaicpark.jp/>

# 木工のまち・大川と美しい列車の旅～300年の歴史とともに郷土に親しむ

天領(江戸幕府の直轄地)・日田から大川へつながる川は、良質な木材を運ぶ木の道であり、大川は木材の集積地として栄えました。この地で船大工の技術を活かして始まった指物が大川家具の起源とされています。九州を走る木の温もり溢れる豪華な列車には、約300年の歴史を誇る大川組子が使われ、地元の木に囲まれながら車窓の風景や地場産食材を楽しめます。木工のまち・大川はその技を活かしながら、新たな旅を始めているのです。



**大川家具 map1**

筑後川の河口にある大川市は、木材の産地日田から川を下ってくる木材の集積地であり、有明海へ向かう海上交通の要衝として重要な役割を果たしてきました。その中心が大川家具発祥の地といわれる「榎津」で、船の製造や修理をする高度な木工技術を持つ船大工が集住し、木材の集積地でもあったことから「榎津指物」が誕生したと言われています。  
 一般財団法人 大川インテリア振興センター  
 福岡県大川市大字郷原483-8  
 TEL:0944-87-0035 FAX:0944-87-0056  
<http://www.okawajapan.jp/>



**大川TATEGUMI map1**

建築家がデザインを提案し、職人が技術でカタチにする新たな試みも始まっています。自由な発想で、新しい建具を考案し、プロトタイプづくりを実践するのが、大川TATEGUMI。現代の暮らしにマッチした、次世代プロダクツで次なる市場をつくっていきます。  
 大川TATEGUMI  
<http://tategumi.works/>



**日田駅 map2**

地元産の「日田杉」をふんだんに活用し、木の持つ暖かさが駅を利用するお客さまを包み込むような表現となっています。コンコースや待合室・出札室の床一面に日田杉を使用したフローリング、天井にも日田スギを使用したルーバーを用いています。



### かわせみ やませみ

1号車のかわせみが川をイメージする青、2号車のやませみは山をイメージする緑を基調としており、鹿児島線と肥薩線の熊本-八代-人吉を走る観光列車です。球磨地方の森をイメージし、人吉球磨産の「ヒノキ」や「杉」を随所に使用した車内に、リクライニングシートやボックスシート、窓向きに設置したカウンター席などがあります。

<https://www.jrkyushu.co.jp/trains/kawasemiyamasemi/>

### 或る列車

明治39年(1906年)、当時の「九州鉄道」がアメリカのプリル社に豪華客車を発注したものの、活躍する機会がなかった「九州鉄道プリル客車」、通称「或る列車」。1号車内にはロマンチックな色の木材を使用し、格子天井等のクラシカルな雰囲気を感じられる空間に、2号車内は落ち着いた色の木材と組子の雪見障子を使用した個性的なコンパートメント(個室)空間としています。ふんだんに木材を使用した豪華な車内から眺める九州の山や海などの自然を楽しむつ、上質なスイーツコースもいただけます。 <http://www.jrkyushu-aruressha.jp/>

## 新潟・上越～雪国で暮らす知恵は、思いやりと優しさの証

雁木(がんぎ)とは、家の前に張り出した庇の呼び名です。道路沿いの家々が庇を伸ばし、雪深い冬の時期でも生活道路を確保するための、雪国ならではの暮らしの知恵です。南魚沼市の塩沢宿や上越市の雁木通りは、雪国らしい街並みを歩くことができます。さらに組子をアートに高めた作品と出逢ったり、木の優しさがあふれる観光列車で新潟の四季を訪ねるのも一興です。



塩沢宿牧之通り [map1](#)

宿場町として賑わっていた塩沢宿の伝統的な街並み形成を目指し、雪国特有の雁木の街並みが再現されています。雪国ならではの風景の中で、かつての面影を味わいつつ、ゆったりとした時の流れを感じることができます。

塩沢商工会 新潟県南魚沼市塩沢1112-32 Tel 025-782-1206 Fax 025-782-4044 <https://shiozawasho.jp/>





### 高田地区の雁木通り map2

雁木は雪国の冬期間の通路を確保するため造られたもので、新潟県はもとより東北から山陰まで分布しています。町家で生活を営む各戸が私有地を提供し、雪国における生活通路として重要な役割を果たしています。高田のまちの雁木通りは、現在も日本一の長さを誇っており、住民やここを訪れる人々に便利で安全な通路として使われています。

公益社団法人 上越観光コンベンション協会  
 新潟県上越市藤野新田175-1  
 TEL:025-543-2777 FAX:025-545-1113  
<http://www.joetsu-kanko.net/>



### えちごときめきリゾート雪月花

新潟県の観光列車で、車窓からは妙高山や日本海などの絶景を楽しむことができます。車内エリアごとに杉、樺、ブナなどを使い分け、温かみのある空間でくつろげます。日本最大級の側窓で世界で唯一の前面展望を専有できる個室も備え、五感で楽しめる素敵な旅を提供します。

えちごときめき鉄道株式会社

<https://www.echigo-tokimeki.co.jp/setsugekka/>



### 上越妙高駅 「もてなしドーム」「駅雁木」 map3

駅舎コンセプトは「さくらと雪の平原」。市街地に面した東口は、雁木の街・高田にふさわしい「駅雁木」と上越地域産木材を使用した木組みの天井が解放感のある、「もてなしドーム」を楽しむことができます。西口には、妙高連山の眺望を臨む展望デッキ「光のテラス」を設け、高田の桜をイメージした「桜の庭」があります。「高田城百万人観桜会」が開催される4月には桜並木が来訪者を迎えてくれます。

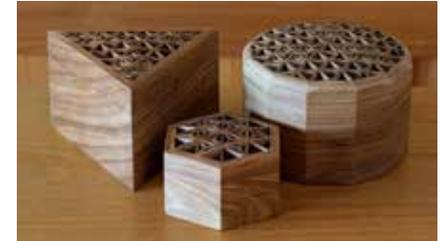
所在地：上越妙高駅（新潟県上越市大和2）

問い合わせ先：新潟県上越市都市整備部道路課 電話：025-526-5111（代表）

URL：<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/kotsu/station-ready.html>



Photo by Yasuyuki KAWANISHI + ICHIBANSEN/nextstations



### 組子アート

蓋に和のアートである「組子」をあしらった小箱。「組子」を立体的に削り出す事で、見た目だけではなく手触りも楽しめる、新しい発想の小箱です。利用されている樹種は、ヒノキ（長野の木曾地方）が主で、色味の具合で小物には、地元高田公園のソメイヨシノや、タモ、チャンチンなど広葉樹でも比較的柔らかいものも使います。メゾン・エ・オブジェ、ミラノサローネ、アンピエンテ等にも出展されています。ほかに、組子を使った建具やアート作品などがあります。

猪俣美術建具店 <https://k-ino.jp/>

## 富士山～荒ぶる自然と信仰、木とともに生きる旅

富士山は日本を代表する観光地ですが、いくたびもの噴火により神の住む山として畏れられ、崇められてきた歴史もあります。今では海外からの来訪客が多数訪れ、富士山を堪能できる施設や製品、サービスがあります。富士山麓に広がる森林は、富士山信仰や人々の生業と深く関係してきました。伝統的建築物や民家に木材が使われてきたほか、富士ひのきはブランド材として新たな活用が広がっています。さらに木と森を通じて、日本の良さや自然への親しみを伝えようとする取組も増えています。富士山という日本のシンボルを、木の文化という文脈でたどってみるとこの地の新しい楽しみ方が見えてきます。



静岡県富士山世界遺産センター map1

世界遺産を「保護し、保存し、整備し及び将来の世代へ伝えることを確保する」拠点施設です。中心となる展示棟は木格子を組み上げた逆円錐状の「逆さ富士」の形をしており、木格子は「FUJI HINOKI MADE」の木材を使って、ひとつひとつ形の違う8000ピースの部材を組み合わせで作られています。展示棟内ではスロープを登りながら、映像や展示を通じて富士山の疑似登山体験ができます。 静岡県富士宮市宮町5-12 <https://mtfuji-whc.jp/>



### 世界文化遺産・富士山と木の関係

日本のシンボルである富士山は、その美しさだけでなく、度重なる大噴火により神の住む山として畏れられ、崇められてきた歴史があります。富士講に代表される信仰と浮世絵など様々な芸術を育んだ富士山は、人と自然の共生の象徴であり、「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」として2013年に世界文化遺産に登録されました。

富士ひのきは静岡県の富士流域で植栽されているひのきで、火山灰質のため長い年月をかけて成長し、年輪が詰まって強度の高いのが特徴です。富士山の自然とともに、この地域の文化や暮らしと深く関係してきた木を辿る旅が、富士山の新たな顔を見せてくれます。



### 富士山本宮浅間大社 [map2](#)

全国に約1,300社ある浅間神社の総本社です。本殿は徳川家康による造営で、二重の楼閣造は「浅間造り」と称され、他に例がありません。一説には富士山を仰ぎ見るために二重楼閣にしたともいわれています。

静岡県富士宮市宮町1-1

<http://fuji-hongu.or.jp/sengen/>



### 富士ヒノキの森～FUJI HINOKI MADE

富士市や森林組合、加工組合などで組織する富士地区林業振興対策協議会が「FUJI HINOKI MADE(フジヒノキメイド)」として地域のブランド材を生産しています。これは「環境に配慮して適正管理された森林」を示す国際認証SGECを取得した山林から産出され、静岡県富士山世界遺産センターの木格子は、国際基準の認証「SGEC/PEFC-CoCプロジェクト認証」を国内で初めて取得しました。また、JR新富士駅構内の「アスティ新富士」の入口前の階段や天井にも活用され、来訪者を迎えてくれます。

Facebook : FUJI Hinoki MADE フジヒノキメイド有限責任事業組合



### 旧稲垣家住宅 [map3](#)

文化元年(1804年)、大淵地域に建築された稲垣家住宅は、富士市内で現存する最も古い民家で、現在では富士山かぐや姫ミュージアムの屋外展示として、広見公園内に移築されています。住宅は入母屋形式で兜造りの茅葺屋根で、立派な梁が重厚感を感じさせます。「使える文化財」としてこの住宅を舞台に音楽会が開かれたり、公開日には囲炉裏に火を入れお茶をふるまうサービスもあります。

富士山かぐや姫ミュージアム

<http://museum.city.fuji.shizuoka.jp>



### 富士山の森から生まれる

#### プロダクトたち

「Mt. FUJI WOOD PROJECT」は、富士山周辺の森林整備や環境保護、資源活用を目的とした木製品開発プロジェクトです。デジタル製造技術で、微細な加工を施したデザイン性の高いアイテムは、その購入を通じて富士山周辺の森を維持することにつながります。

「木もの NAKAYA」の木工職人の中矢さんは、岐阜県高山で家具職人として経験を積んだ後、富士宮市に移住し、倒木や間伐材などの生木を使った美しい日常使いの小物やランプシェードを制作しています。多様な樹種が生み出す、自然の造形美は人気を博しています。

Mt. FUJI WOOD PROJECT

<http://www.mtfuji-wpj.com/>

木もの NAKAYA

<https://www.komono-nakaya.com/>



### 日月倶楽部 [map4](#)

「日月倶楽部」は富士山の自然を眺めながらゆったりと自然に触れる宿泊施設です。古民家を移築した建物や富士山を望む能舞台などを使って様々な滞在・体験ができます。富士箱根伊豆国立公園内の自然湧水や自然林に恵まれた約2万坪の敷地を使って、統合医療に基づいたプログラムで予防医学のアプローチも実施しています。

静岡県富士宮市猪之頭2271

<https://hitsuki-club.com/>



### 三保松原 [map5](#)

2013年、富士山世界文化遺産の構成資産に登録された美しい景観が特徴です。約7キロの海岸に約3万本の松が生い茂り、富士山と海とで生み出される風景は歌川広重の浮世絵など多数の芸術作品に登場しています。一角には、天女伝説で知られる羽衣の松があり、毎年10月には三保羽衣新能が開催されます。

静岡県静岡市清水区三保



### 日本平夢テラス [map6](#)

標高300mの丘陵地にあり、駿河湾越しに富士山を仰ぎ見ることができます。静岡市や富士市から調達した「しずおか優良木材認定制度」により認定されたひのき、杉を使用しています。施設内では、日本平の歴史や文化を紹介する展示や景色を楽しむラウンジスペース、展望フロアがあります。

静岡県静岡市清水区草薙600-1

<https://nihondaira-yume-terrace.jp/>

## 高山・飛騨～木の文化をたどって歩く、歴史と技の楽しみかた

高山市の、飛騨工制度が有する「木を生かす」技術や感性、文化と社寺建築群や大工一門の作品群、伝統工芸等は「飛騨匠の技・ここ～木とともに、今に引き継ぐ1300年」として2016年、日本遺産に登録されました。飛騨市の古川で古い街並みの趣を感じながら、匠の技やからくり人形の操り体験などができる施設を巡るのも楽しそうです。古民家を改装した体験型宿泊施設では、木と向き合ってもものづくりにいそしむ、次世代の匠たちを育てる取組も始まっています。



吉島家住宅 map1

1907(明治40)年に建てられた町家で、国の重要文化財に指定されています。当時の豪商の町家の面影を伝える大規模な建物で、漆が施された柱や梁、立体的な小屋組など、すみずみまで神経のゆき届いた繊細で華麗な美しい造りが見どころです。

岐阜県高山市大新町1-51

高山市公式観光サイト(P 20 掲載の事例)

<http://kankou.city.takayama.lg.jp/>

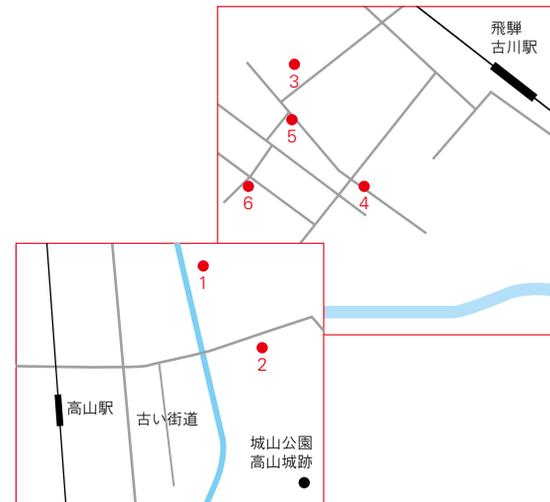


撮影者：池戸比呂志

### 高山城と

### ゆかりの建築群(神明神社絵馬殿) map2

近世初期、天正16年(1588)から慶長8(1603)まで16年の年月をかけて飛騨匠たちが建てた高山城。簡素な中に優雅さと、通常の社寺建築とは異なる力強さを感じさせます。



### 一位一刀彫

江戸時代後期、色彩を施さず、イチイが持つ木の美しさを生かした彫刻として完成されるものです。これらの伝統工芸の技術や木工技術の粋を結集して作られたのが高山祭屋台です。



### 飛騨春慶

400年前に高山で生まれた飛騨春慶は、江戸時代初期、打ち割った木の木目を生かすために透明な漆で盆に仕上げたことに始まる漆器で、木目が見えるため、素材の見立て、加工から漆塗まで全てにわたって高い技術が要求されるものです。



### 飛騨古川まつり会館 map3

古川祭りをいつでも体験できる施設。“動”と“静”が織りなす古川祭・起し太鼓を臨場感ある4K映像で紹介します。館内には本物の古川祭屋台3台を常設展示、からくり人形の操作体験、起し太鼓の試し打ち体験もできます。

岐阜県飛騨市古川町壺之町14-5  
<http://www.okosidaiko.com/>

提供：飛騨市



提供：飛騨市

### 瀬戸川と白壁土蔵街 map4

高山の奥座敷と称され、飛騨に残るもう一つの古い町並みとして知られる飛騨古川。碁盤のような町割りや古い町家が今も残り、出格子や土壁の美しい白壁土蔵街は趣きある町並みで散策にぴったりです。



### 飛騨の匠文化館 map5

提供：飛騨市

飛騨の匠の足跡、匠の技術、道具を展示。飛騨で育った木材を使い、飛騨の匠の技を受け継ぐ地元の大工たちによって建てられ、釘を1本も使っていません。館内では各種の継ぎ手や木組みの見本展示、千鳥格子などを組んでみることで体験コーナーもあります。

岐阜県飛騨市古川町壺之町10-1

飛騨市公式観光サイト

飛騨の旅 <https://www.hida-kankou.jp/spot/3065/>

### 飛騨の森でクマは踊る(ヒダクマ) map6

FabCafe Hidaは、誰でも気軽に木工やデジタルものづくりを体験できるカフェと木工房があり、また森歩きや滞在制作もできる体験型宿泊施設です。FabCafe Hidaの建物は、飛騨古川の地で100年以上の歴史を持ち、かつて酒蔵として栄えた古民家を改装しています。運営するヒダクマは、主に建築家やデザイナーの招聘、海外の建築系の大学の合宿の受入れ等を行いながら、広葉樹をはじめとした地域の森林資源の活用を推進しています。

株式会社飛騨の森でクマは踊る/FabCafe Hida

〒509-4235 岐阜県飛騨市 古川町式之町6番17号 TEL:0577-57-7686

株式会社飛騨の森でクマは踊る

<https://hidakuma.com/>

<https://www.facebook.com/hidakuma/>

FabCafe Hida

<https://fabcafe.com/hida/>

<https://www.facebook.com/fabcafehida/>

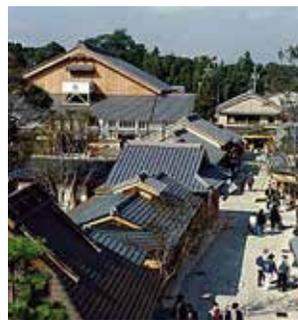
## 熊野古道・伊勢路～巡礼と尾鷲ヒノキを辿る現代の旅人

古代から中世にかけて、本宮・新宮・那智の熊野三山の信仰が高まり、多くの人々が熊野を参詣しました。熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が、2004年に世界遺産に登録されました。熊野古道の発信・交流施設である三重県立熊野古道センターでは日本農業遺産にも認定された尾鷲ヒノキ6549本を使用しており、古道と木々の景観とともにその来歴を感じることができます。伊勢神宮内宮参りの後は木造家屋の街並みのおかげ横丁で楽しめます。また、尾鷲わっぱも素材の良さを実感できる逸品です。



### 熊野古道 map1

古代から中世にかけ、本宮・新宮・那智の熊野三山の信仰が高まり、上皇・女院から庶民にいたるまで、多くの人々が熊野を参詣しました。熊野三山を含む3つの霊場を結ぶ参詣道とその文化的景観が「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されました。「熊野古道伊勢路」は、参詣道の中でも伊勢神宮と熊野三山の二つの聖地を結ぶ道です。熊野古道では、昔から林業者が古道を活用し、造林作業を行っていたため「尾鷲ヒノキ」の美林の中を歴史と文化を感じながら歩くことができます。



### おかげ横丁 map2

伊勢神宮へのおかげ参りブームが起こった江戸から明治期の伊勢路の木造家屋の古い町並みを移築などで再現した60店舗が集まるおかげ横丁。建築材料にはトガ(桐)材が使用されています。三重県や伊勢地方の魅力を散策し、食べ歩きやお買い物など、老舗の味から名産品、歴史や風習、人情まで一度に体感できます。門前町から伊勢神宮にお参りすると、そこには宮域林と呼ばれる伊勢神宮の森が待っています。

三重県伊勢市宇治中之切町52

<https://www.okageyokocho.co.jp/>



### 三重県立熊野古道センター map3

熊野古道の発信・交流施設として建設された「三重県立熊野古道センター」は、尾鷲ヒノキの角材を束ねて作られる組柱・組梁・組壁による簡潔で新しい木造の構造で、端正な日本建築の伝統を守りながら、木造の直線的な美しさ、力強さが表現されています。交流棟中央にある組壁には、トレーサビリティの証として、建設に使われた木々が大切に育てられた産地名が記されています。 三重県尾鷲市向井12-4 TEL:0597-25-2666/FAX:0597-25-2667 <http://www.kumanokodocenter.com/>



### 伝統工芸品「尾鷲わっぱ」 map4

古くからその材質の良さから全国的に有名な「尾鷲ヒノキ」。美しい木目と緻密な年輪が特徴です。また、その剛性の高さから建築資材としては最適です。「ぬし熊」の漆器は、その「尾鷲ヒノキ」の厳選した上質部分を使用して作られます。漆も天然素材にこだわり、一切の混ざり物の無い一級品を使用。気難しい天然素材ゆえに、その仕上がりは手にする者を魅了する深い色合いに仕上がります。  
ぬし熊 三重県尾鷲市大字向井493-15 TEL 0597-22-9960 <http://nushikuma.com/>

## 高知県梼原町～雲の上の町で森と出逢う

高知県梼原町は町面積の91%を森林が占め、標高1455mにもなる雄大な四国カルストに抱かれた自然豊かな山間の町です。ギャラリー、ホテル、物販、図書館など、来訪者を出迎えてくれる圧倒的な木の建築の存在感は、あたかも天空の森を巡っているような感覚を覚えるほどです。「梼原は木と最初に出会った場所で『木の恩人』のようなもの。梼原で木の良さや木を大事にして生きる哲学を教えてもらった」と設計を手掛けた隈研吾氏は語っています。



雲の上の図書館



photo by Takumi Ota

梶原町の特産物販売とホテルが融合したまちの駅「ゆすはら」は、梶原町の顔として観光客を出迎えてくれる施設。施設の東の外壁に用いられている茅は、町内の伝統的な茅葺屋根から学んだものだそうです。特徴的な景観を生み出しつつ、通気性や断熱性に優れ、自然の力で快適な室内環境を保ちます。コンセプトである、まちの中の「森」を体現する内部には、杉丸太の柱の森を巡るような楽しさがあります。



photo by Kawasumi・Kobayashi Kenji Photograph Office

「雲の上の図書館」は外壁や内装に梶原町の杉とひのきがふんだんに使われ、圧倒的な木のスケール感と木の温もりを随所に感じる洗練された空間。特に柱や壁から枝のように木材が伸び、交錯している姿が印象的です。図書館は鉄骨造り一部木造2階建て、延べ床面積は約1940平方メートルあります。



photo by Takumi Ota



「雲の上のギャラリー」は枝葉が広がって梶原の森に溶け込む建築。日本建築の軒を支える「斗栱(とぎょう)」という伝統的な木材表現をモチーフとして、刎木(はねぎ)を何本も重ねる「やじろべえ型刎橋(はねばし)」という、世界でも類を見ない架構形式の建物です。見事な景観を生み出し、木材の可能性を見せてくれます。

梶原町×隈研吾建築物

<http://www.town.yusu-hara.kochi.jp/kanko/kuma-kengo/index.html>

## 吉野・堺・灘～桶樽と日本酒の物語

蔵のある奈良県吉野郡は昔から林業の盛んな地域でした。蔵の横を流れる吉野川上流にある川上村は、室町時代から500年の植林の歴史を持つ林業地域で、桶の部材である「樽丸」の産地として発展してきました。樽丸は吉野川を筏で下り、海に出てから西宮・堺へと運ばれ、樽は西宮で、桶は堺で作られ、名醸地の灘に運ばれ酒造りに使われ、その技術は今も受け継がれています。地域をまたぎ、森から木材、樽丸から桶樽、そして酒づくり、それを供する店まで、物語は続きます。



### 菊正宗「マイスターファクトリー」

酒造りの過程から用具類に至るまでの知識や現物とのふれあい、灘の酒を醸す技・水・米・風土、酒造りの情熱や伝統にまつわるこだわり、また日本酒をめぐる新しい楽しみ方や文化の姿・・・など現在・過去・未来を自在に駆けめぐる日本酒の世界を展開し、「知るは楽しみなり」をあますことなく感じ取れる空間です。

<http://www.kikumasune.co.jp/tarusake-mf/>



### 吉野林業

日本の造林発祥の地である奈良県吉野地域には、約500年にわたって培われた造林技術で育まれた美しく重厚な森があります。日本遺産「森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとところ～美林連なる造林発祥の地“吉野”」として登録されました。



### 美吉野醸造

吉野林業の地元の蔵元で、吉野杉を使った木桶仕込みの酒造りを復活させました。

<http://www.hanatomoe.com>



### 剣菱

暖気樽職人の育成等もしながら、甑・麹蓋・暖気樽等を用いた昔ながらの酒造りを実践しています。

<http://www.kenbishi.co.jp/story/>





### 清光林業

吉野地域では、室町時代より長年にわたり優れた林業技術が開発・伝承されています。その起源は、主に桶・樽の材料を生産する「樽丸林業」として発祥した林業です。



### 吉野中央木材

美吉野醸造が吉野杉を使った木桶を復活させる「吉野ウッドプロジェクト」に参画しています。  
<http://www.yoshinostyle.com>



### 春亮木材

灘や伊丹などにおける酒造りで使われる酒樽の側板を供給するために、「樽丸」生産は江戸時代中期に始まったとされます。春亮木材の春増氏は樽丸づくりの技を今に伝えています。



### 吉野杉の家

旅行者と宿泊先をつなぐ「Airbnb」と吉野町がコラボレーションして建設されました。吉野の山から伐り出した木を使い、地元の大工と職人の手で作られました。

<https://www.yoshinocedarhouse.jp/>



### ゲストハウス三奇楼

旅人や木材を運搬する筏師たちの疲れを癒す宿として利用されていた元料亭旅館をリニューアルしたゲストハウス。吉野の街並み・暮らしを体感できます。  
<http://sankirou.com/>



### 山中酒の店・佳酒真楽さかふね

全国の木桶仕込みの酒蔵の日本酒を取りそろえる酒店。飲食店舗の装飾も大桶のリユース材で装飾を行っています。

<http://yamanaka-sake.jp/sakafune/>

## 長野・軽井沢～懐かしくて、新しい、木と森が迎える国内有数のリゾート

避暑地として著名な軽井沢。豊かな自然に恵まれた軽井沢から歴史の街・上田や善光寺のお膝元・長野までをつなぐ、木をふんだんに使った列車や洗練されたラウンジが優雅なリゾート気分を盛り上げてくれます。ゆったりと時間を過ごすリゾートでは、ハルニレテラスのウッドデッキでの買い物や自然に親しむプログラムが、都会の喧騒を忘れさせてくれるでしょう。玄関口の長野駅では来訪者を大庇が迎え、善光寺参りの拠点となっています。



### しなの鉄道軽井沢駅 [map1](#)

しなの鉄道軽井沢駅の建物は1997年の長野新幹線開業に伴って取り壊された旧駅舎を、明治43年(1910年)当時の姿で軽井沢町が復元したものです。かつて「旧軽井沢駅舎記念館」の貴賓室だった2階は、観光列車「ろくもん」乗客のラウンジとなっています。高級感が漂う調度品が乗客をお迎えます。

### しなの鉄道ろくもん

ろくもんは自然と文化に恵まれた軽井沢から歴史の街・上田や善光寺のお膝元・長野までをつなぐ懐かしくて新しい、楽しい列車。2人・4人掛けの対面席やソファ席、中央には木のボールに埋まって遊べる「木のプール」を設置しています。地元のレストランが参加する食事メニューのコースは、軽井沢発長野行きは洋食のコース、長野発軽井沢行きは懐石コースで名店のシェフが監修しています。

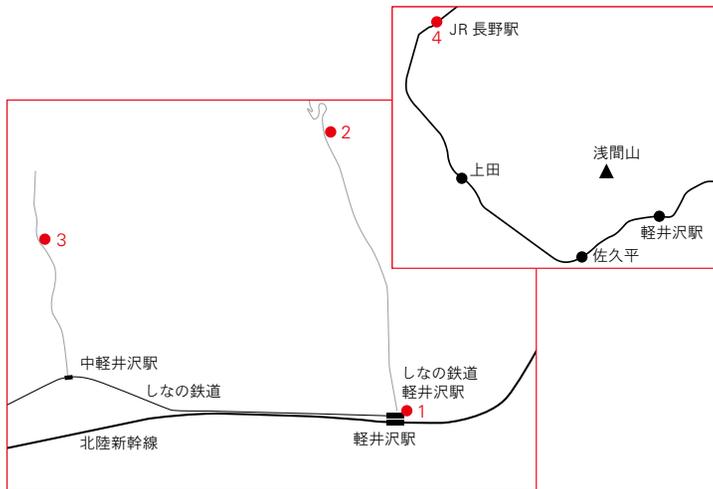
<https://www.shinanorailway.co.jp/rokumon/>



### 旧三笠ホテル [map2](#)

日本人による設計・施工の純西洋式の木造2階建てのホテル。1905年(明治38年)に竣工し、多くの文化人・財界人が宿泊しました。建築資材も現地のアカマツを使うなど、日本の素材によって完成されたホテルです。

重要文化財・旧三笠ホテル 長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢1339-342  
軽井沢町公式HP <https://www.town.karuizawa.lg.jp/>



## 軽井沢星野エリア

### ハルニレテラス map3

湯川の清流に寄り添うように自生している約100本のハルニレ(春楡)の木立を生きしながら、9棟のモダンな建物をウッドデッキでつないだ「小さな街」。「軽井沢の日常」をコンセプトにした、16の個性的なショップ、レストランが、軽井沢での滞在を豊かに彩ります。

長野県軽井沢町星野

<http://www.hoshino-area.jp/shop>



### JR長野駅 map4

仏都長野の玄関口にふさわしい長野の門を表現した大庇(おおびさし)・列柱と、善光寺にゆかりのある如是姫(にょぜひめ)像を据えた中央広場が、来訪者をお迎えます。開放的な空間に、雨や雪に濡れずに移動できる雨よけが配置されています。広場内の各施設は木のぬくもりを感じさせるものになっています。



### ピッキオ map3

ピッキオは「森の価値を高め、守ることを目標に、森の生き物との出会いをサポートし、その面白さや不思議さに触れるネイチャーツアーを開催しています。軽井沢星野エリアの一角、森からの沢水でできた「ケラ池」のほとりに拠点があります。

長野県北佐久郡軽井沢町星野

<https://picchio.co.jp/>



## ブナの森とヒバの森～癒しと健康、五感への贈り物

白神山地は世界最大級のブナの原生林と貴重な動植物が生息する生態系を有する地域として、1993年に日本初の世界自然遺産に登録されました。また、雪の多い地方でなければ育たないと言われる青森ヒバは、北の厳しい環境でゆっくりと成長するため、緻密で木目の細く美しい木になります。ここでは、ブナとヒバを堪能できる場所や製品を訪ねて、心を癒し、五感を研ぎ澄ます旅を選んでみるのも新鮮です。



アソベの森いわき荘 map1

「アソベの森」と古くからそう呼ばれてきた、神が宿る山・岩木山に抱かれるように佇む宿・アソベの森いわき荘。温泉浴室は青森ヒバの丸太で小屋を組み、湯縁、浴槽も青森ヒバで造られています。食事処はブナの枝とアケビ蔓で編み上げた照明が印象的です。築100年の古民家を再生した食事処には本格的な籠と囲炉裏を設け、オープンキッチンで地元の酒と料理を提供しています。  
青森県弘前市大字百沢寺沢28-29 <http://www.iwakisou.or.jp/>





### 鶴の舞橋 map2

津軽富士見湖の兩岸を結ぶ全長300メートル、総ヒバ造りの三連太鼓橋。橋脚には樹齢150年以上の青森ヒバ700本を使用し、日本古来の建築技術を駆使してつくられました。堤長は4,178メートルと、その長さは日本一です。周囲の風景に溶け込み、水面に映るその姿は見る人を魅了します。

<https://www.medetai-tsuruta.jp/spot/sightseeing/tsurunomaibridge.html>



### BUNACO(ブナコ)

「地域の豊富なブナ資源をどう有効活用しよう」この考えがBUNACOが生まれた背景です。ブナをかつらむきのように薄いテープ状に加工し、ぐるぐると巻きながら成型していく変わった製法で薄さはなんと1ミリ。むく材を削り出して作る従来の方法より、ブナ材のテープを使用しそれをコイル状に巻き少しずつスライドする事で同じ形態を作り出し、照明器具を始め、様々なプロダクトを生み出しています。

ブナコ株式会社 青森県弘前市豊原1丁目5-4 TEL:0172-34-8715 FAX:0172-36-1119

<http://www.bunaco.co.jp/> <http://www.facebook.com/bunaco.jp>



### 五能線「リゾートしらかみ」

青森県川部駅と秋田県東能代駅を結ぶ五能線を走るリゾート列車。展望室はブナコや秋田木工といった秋田・青森県産の工芸品やシンボルツリーにより非日常的な空間を演出。地酒などの地産品が買え、その場で楽しめるカウンターも車内に設置しています。

<https://www.jreast.co.jp/akita/gonosen/>



## 地域のアンテナショップが伝える木のおもてなし

都心で感じる地域の魅力、文化、人、素材、味。各アンテナショップでは木を利用して上質な空間をつくりだし、さまざまな体験やコミュニケーションに取り組んでいます。ここで地域の魅力に気づいたら、次は現地へ足を運び、産地を訪ね、人に会い、滞在や買い物をしたくなる。本物を味わうための本物の空間は、木の温かみと人の温かみこそで実現できるのです。



### NOCO(銀座NAGANO)

銀座ずらん通りに位置するNOCOの外観はまるで木の積層体。不燃都市銀座では出会えなかった木の温もりには人は足を留め、自然の安らぎを想います。店舗も木や自然に因むものばかり。銀座NAGANOは長野県の新感覚アンテナショップ。信州の木のぬくもりあふれるイベントスペースで、長野県産材を使用したワークショップや、木工クラフトフェアなど、木を通じて豊かに暮らすためのイベントを実施。座り心地のよい工芸のウッドチェアで珈琲も楽しめます。

東京都中央区銀座5-6-5

問い合わせ先:

株式会社アイシン TEL 03-6274-6431

銀座NAGANO <https://www.ginza-nagano.jp/>

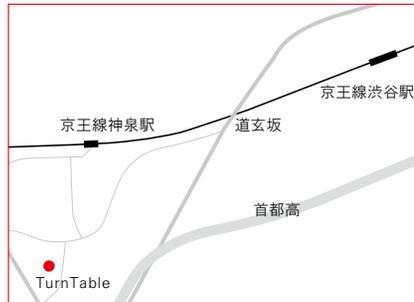




### 日本橋とやま館

富山県の新たな情報発信拠点として、2016年6月に東京・日本橋に開館。「富山の上質なライフスタイル」を体感できるように、壁には和室の襖に使用する「しけ絹」が用いられ、観光交流サロンには「井波彫刻の欄間」が設置されています。また、「トオリニワ(土間)」をイメージした交流スペースには、立山連峰の山並みを表現した長さ30mの木の格子壁があるほか、和食レストランには、県産木材を使用した床材、テーブルディスプレイ棚や「海越しの立山連峰」を表現した美術組子があります。こうした館全体に配置された木材の香り、温かみ、デザインが、来館者に富山の上質な暮らしや木の素晴らしさを自然な形で感じさせ、自然豊かな富山への期待や興味を高めています。

東京都中央区日本橋室町1-2-6日本橋大栄ビル1F TEL 03-6262-2723 <https://toyamakan.jp/>



### TurnTable

徳島の食材を提供するレストラン、交流ラウンジ兼マルシェコーナー、宿泊施設を有する施設です。「モノではなくヒトからの情報発信へ」をテーマに、食や宿泊を通じて、徳島の持つ価値を利用者に体験してもらい、その魅力を発見、発信し、旅行や移住など、徳島への回帰を誘発します。レストランの長テーブルや床など内装は徳島県神山町から伐り出した杉の木一本を無駄なく使い創り出され、他にも藍染ののれん等、徳島県の伝統文化を感じさせる内装が来訪者をもてなします。

東京都渋谷区神泉町10-3 TEL 03-3461-7733(ホステル) 03-3461-7722(レストラン) <http://turntable.jp/>

「木の文化・木のおもてなし」ガイドブック

発行元:

公益社団法人 国土緑化推進機構

株式会社 ユニバーサルデザイン総合研究所

林野庁補助事業

デザイン: 則武弥 (ペーパーバック)

印刷・製本: 株式会社サンワ

記載内容・写真等の無断転載・複写を禁じます



